

## 江戸幕府の医療制度に関する史料(六)

―鍼科医員島浦(和田)・島崎・杉枝・栗本家

『官医家譜』など―

香 取 俊 光

暫く休んでいたこのシリーズだが、また再開して史料を紹介する。今回から四回に分けて東京大学史料編纂所所蔵の『官医家譜』の中から鍼科医員の家譜を紹介していく。その理由は、筆者が幕府の医療制度、特に鍼と盲人を研究課題としている上から選んだ。今回は、管鍼法を創始し盲人教育に尽力した杉山檢校和(一六二〇～九四)の弟子達の中で、『官医家譜』に所載されている和田・島崎・栗本・杉枝の四家の系図を紹介する。

シリーズ休止中に、筆者の研究のほぼ全容に当たる「江戸幕府における鍼科と盲人の鍼科登用に関する研究」(長尾榮一教授退官記念論文集『鍼灸按摩史論考』、一～一四六頁、桜雲会、一九九四年)、そのダイジェスト版『江戸幕府における鍼科医員と盲人鍼医(一)(二)』(『理療の科学』第十六巻第一号、第十七巻第一号、一九九二年、一九九三年)、「杉山和一」その文献と伝説(『理療の科学』第十八巻第一号、一九九四年)を發表した。その中で、鍼科の医師・鍼施術者三十四名を提示し、更に鍼科医員二十五名中に盲人が九名存在し、盲人鍼医が重要な医員の供給源であった事を指摘した。次に、具体的に二

十五名の鍼科医員を紹介する。

盲人の鍼科医員：九名

三島檢校安一・杉枝檢校真一・杉島檢校不一・島浦檢校益一(後和田に復姓)・板花檢校喜津一・島崎檢校登栄一・石坂檢校志米一・芦原檢校英俊一・平塚惣檢校東栄一  
盲人以外の鍼科医員：十六名

坂寿三幽玄・坂立雪元周・藤木十左衛門某・山本民部道照・佐田玉川定重・佐田玉縁定之・山崎宗円次氏・栗本杉説俊行・増田寿徳良貞・須磨良仙某・上田施針庵東曆・茂木玄隆某・吉田秀庵不先・島田幸庵某・畠山玉隆常信・前川玄徳雄寿

この外にも九名の鍼施術者がいて、その中には杉山檢校和一もいる。杉山の研究はかなりあるが、杉山の弟子達の研究はほとんどない。筆者のまとめでは、杉山の弟子は次の十四名であった。

幕府に関わった鍼医：九名(栗本は盲人でない)

医員：三島・杉島・杉枝・島浦・島崎・石坂・板花・栗本

医員以外：杉岡つげ一

諸大名登用：五名

徳山ゑ一・松山てる一・美尾都・美津都座頭・春都座頭  
この内『官医家譜』を見ると杉山の弟子は島浦・島崎・杉枝・栗本の四家が所載されており、これから紹介する事にした。

また、ここまで紹介して来た杉山の弟子は「杉山真伝流」の流派に属する者で、この他に「日本一流杉山(夢想)流」と呼ばれる別派もあり香取十連社の子孫が一子相伝している。この流派の秘伝書「日本一流杉山流 鍼術十箇条」を最後に紹介する。

翻刻に際して、常用漢字に直したが、次に掲げた変体仮名はそのままにした。

て一而、は一者、も一茂、え(へ)一江、と一与、より  
一ふ

また、史料中に尊敬の意味をもったマス明け(闕字)、文章の途中から文頭に改行する平出や他の行頭より飛び出る拾頭はマス明けしてその行間に( )として注を付した。

文中の( )は筆者が『新訂寛政重修諸家譜』(全二十二冊、続群書類従完成会。以後『諸家譜』と略す)・徳川諸家系譜』(第一、続群書類従完成会、一九八二)等で補足した。

最初に紹介する「和田家系譜」は、『官医家譜』四に所収されておられ、『諸家譜』第二十二(三四五〜六頁)と比べると母・妻・兄弟姉妹・法名等の記事はないが、経歴の詳しい部分がある。

初代島浦檢校益一は盲人鍼医で、杉山に師事したのでその身一代限り島浦と名乗り、杉山・三島安一の遺跡を継いで三代目関東惣檢校(宝永六年十月十九日)享保廿一年・元文元年二月廿二日、一七〇九〜一七三六年)となった。その子孫は和田に

復姓し、幕末まで鍼科医員を勤めた。

橘姓

和田

家紋 九曜  
丸二丸鳥

高三百俵

和田左衛門尉朝成末流和田五郎太夫直好男

島浦惣檢校

益一

(盲人)町医師にて針術習業宝永五子年七月二日召出され二十人口賜 大納言殿(徳川家宣)附(徳川綱吉に)拜謁御

紋之時服二賜翌三日より奥詰宝永六丑年十月十九日総檢校同年十二(十二)月朔日白木書院にて檢校之御礼同日加秩三百俵月俸ヲ合三百俵高(月俸を取公され粟米に改められる)享保元年(徳川家継薨御により)五月十六日表江出寄合同十一月午年 淨円院殿(お由利の方、巨勢利清女、紀伊光貞側室、徳川吉宗生母)御用同年惇信院殿(徳川家重)御用同十四西

年四月十三日西丸大奥勤仕其外 月光院殿(お喜世の方、勝田著邑女、徳川家宣側室、徳川家重・家継生母)右

衛門督(田安宗武) 刑部卿殿(橋宗尹) 法心院殿

(おこんの方、太田政資姉、家宣側室)御診元文辰年二月廿二日総檢校御免致仕(なお西城大奥の療治を承るにより)月俸十口ヲ養老料ニ賜寛保三亥年九月廿八日死(法名了玄) 浅草

正法寺三葬（妻上杉彈正大弼家臣福島十兵衛某女）

和田春徹 伝次郎（母十兵衛某女）  
直秀

宝永六丑年十一月三（十三）日（徳川家宣に）初見享保元辰年十月朔日 天英院殿（照姫、近衛基熙女、徳川家宣側室）

月光院殿御広敷御用同十三申年十二月七日 天英院殿御広敷御用同十四酉年六月十三日 法心院殿御用同十五戌年十二月廿七日 天英院殿ニ拜謁同十七子年二月十四日 証明院殿（比宮、伏見宮邦永親王女、家重室）

敷御用同十八丑年四月廿二日十人口賜同廿卯年八月十四日 天英院殿御不例御鍼治同十二月 右衛門督殿簾中之方（知姫、近衛家久女、法蓮院）御用（元文元年二月二十二日家督）元文三年十二月朔日死（法名善徹）同寺三葬（妻林牛斎某女）

（女子） 和田春長 伝次郎（母牛斎女）

正直 享保十七子年七月廿一日（徳川吉宗に）初見（十五歳）元文三年十二月廿七日家督小普請同四未年二月廿四年 天英院殿御広敷御用（同年五月二十一日より二丸広敷療治）延享三寅年十一月十日御広敷御用同四卯年二月五日御診同月

（女子） 十五（十六）日奥医師同五辰年二月廿三日御部屋の方御用宝曆五亥年十二月廿五日西丸御用同六子年九月二日死（三十九歳、法名芳山）同寺（葬、妻杉山権右衛門正安女、後妻野間玄琢正恭女）

（女子） 和田春長 伝五郎（母正恭女）

（某） 宝曆六子年閏十一月（三日）家督小普請（十四歳）明和五年正月三日（徳川家治に）初見天明元丑年十一月十五日死四十三（三十九）歳（法名映山）同寺三葬

実喜多村安貞直方二男 和田春長 幾三郎（母村上文次郎行正女）

正定 高三百俵 長庵玄寛女

次に紹介する「島崎家系譜」は、『官医家譜』十六に所収されておき、『諸家譜』第二十二（七八〜九頁）と比べると母・妻・兄弟姉妹・法名等の記事はないが、経歴の詳しい部分がある。

初代の登栄<sup>(8)</sup>は盲人鍼医で、杉山に師事後幕府に登用され、  
島浦の跡を継いで四代関東惣録<sup>(7)</sup>(元文元年三月〜同二年六月、一  
七三六〜三七七)を勤め、子孫も幕末まで鍼科医員を勤めた。

藤原姓

有徳院殿(徳川吉宗) 御代

島崎

家紋 横木瓜

高十人扶持

伊藤九郎祐近後胤初大久保加賀守(忠朝)ニ仕後浪人増田源兵衛片信男

島崎惣録検校

登栄都<sup>(とよひ)</sup> (一)

(盲人にして鍼治をよくするにより)享保十四年「月日不知」<sup>(「テウワリユル」)</sup>  
惇信院殿(徳川家重) 御鍼御用同十五年四月十三日召

出式十人扶持(五月十五日) 御奥<sup>(アツシ)</sup> 惇信院殿御入之時<sup>(ツツシ)</sup>  
有徳院殿(徳川吉宗)ニ御目見御鍼御用同年九月十九日

一位御方(天英院殿、照姫、近衛基熙女、徳川家宣側室)<sup>(ツツシ)</sup>

御鍼同十八年七月十九日 御簾中御方(寛徳院殿、真宮、<sup>(ツツシ)</sup>

伏見文仁親王女、徳川吉宗室)御鍼同十九年五月廿三日御本丸<sup>(ツツシ)</sup>

大奥女中療治同年十二月十日 刑部卿殿(二橋宗尹)御<sup>(ツツシ)</sup>

鍼享保廿年七月二日 利根姫君(紀伊宗直女、徳川吉宗養<sup>(ツツシ)</sup>

女、伊達宗村室) 御鍼寛保二年八月廿九日死六十八歳(法名<sup>(ツツシ)</sup>

日坊) 牛込七軒寺町浄輪寺ニ葬(妻辻村氏女)

栄元 栄庵 (母辻村氏女)  
片成<sup>(かたし)</sup>

寛保二年五月二日刑部卿殿御広敷御用(十一月五日父の遺跡  
は賜らず新規月俸、鍼医)同年十二月 刑部卿殿御附延享

四年八月七日 月光院殿(徳川家宣側室、徳川家重・家継<sup>(ツツシ)</sup>

生母勝田氏) 御広敷御用寛延二年正月廿七日御同断御医師<sup>(ツツシ)</sup>

(同三年十月二十三日) 月光院殿(お喜世の方、勝田著呂女、<sup>(ツツシ)</sup>

徳川家宣側室、徳川家重・家継生母) 御附同十二月二十六日(徳<sup>(ツツシ)</sup>

川家重に) 初見宝曆二年九月十九日逝去後一統小普請同三<sup>(ツツシ)</sup>

年七月十八日御本丸御広敷御用同年八月廿八日寄合同同年十<sup>(ツツシ)</sup>

二月十五日西丸御広敷御用明和七年正月廿九日死七十巻<sup>(ツツシ)</sup>

(七十)歳(法名日行) 同時ニ葬(妻松下四郎左衛門貫長女)

(某)

幸蔵

信勝 宝曆十一年四月七日 宮内卿殿(清水重好) 小十人組<sup>(ツツシ)</sup> 江被

召出

成裕<sup>(なりゆき)</sup> 栄元 (栄胤 母某氏)

宝曆十一年七月廿四日三男惣領明和四年十二月九日(徳川<sup>(ツツシ)</sup>

家治に) 初見同七年四月五日家督小普請(二十二歳、妻久留<sup>(ツツシ)</sup>

半次郎聖明女、後妻松平安芸守家臣入沢次兵衛忠栄女)

(女子)

〔榮胤 母忠栄女〕  
某

次に紹介する「杉枝家系譜」は、『官医家譜』十七に所収されている。『諸家譜』第二十一（三三八〜九頁）と比べると母・妻・兄弟姉妹・法名等の記事はないが経歴の詳しい部分がある。初代の真一は盲人鍼医で、杉山に師事し本姓の齋藤から杉枝に改めた。始め柳沢吉保に仕えた<sup>(1)</sup>とあり、元禄七年（二六九四）『柳沢保明（吉保）家中分限帳』に、

兵部様御広式（敷）番  
（中略）

- 一 拾両五人扶持 由 一
- 一 拾両五人扶持 三和一
- 一 拾両五人扶持 清 一

とあり、「三和一」が杉枝「さな一」の事と思われる。その後幕府に登用され、島崎の跡を継いで五代目関東惣録（元文二年六月〜同四年二月、一七三七〜三九年）を勤めた。著作の『鍼灸約』があるが存在しない。<sup>(1)</sup>子孫も幕末まで鍼科医員を勤めた。

藤原姓  
常憲院殿（徳川綱吉）御代  
杉枝

家紋 上り藤の内斉字  
丸之内梶之葉  
高式百俵

齊藤豊前介美仲より十二代後胤杉山檢校之成門弟杉枝ト改  
杉枝檢校

真一

（盲人）始松平（柳沢）美濃守吉保ニ仕元禄十四年十二月二日美濃守宅江 常憲院殿（徳川綱吉）御成之節初而拜謁を賜ふ宝永三年十二月十一日御成之節御針醫師ニ被召出月俸式十人口賜奥御奉公同六年二月廿一日寄合享保八年二月四日 惇信院殿（徳川家重）御不予之時針治被 仰付御全快ニ付御祝儀として銀五枚拝領同年二月九日御本丸御広敷御用（三月十五日徳川家重御不予之時療治白銀五枚賜）同年十二月廿八日御広敷病用出精ニ付褒銀五枚拝領同九年十二月十五日同上褒金式十兩拝領同十年六月朔日 淨円院殿（お由利の方、巨勢利清女、紀伊光貞側室、徳川吉宗生母）御同御用同年八月三日 月光院殿（お喜世の方、勝田著邑女、徳川家宣側室、徳川家重・家継生母）御同御用同月十五日取来式十人扶持者収公新規廩米式百俵賜寛保元年四月五日致仕延享四年九月廿三日死七十六（七十四）歳（法名亮明）駒込高林寺ニ葬（妻葉山平右衛門自綱女）  
常憲院殿御筆拝領（福祿の二字）  
真一著述之書  
針灸約 一卷

(某)

実葉山平右衛門自綱三男(四男)

杉枝仙庵 初葉山市五郎

(母松平主殿頭家臣松平八郎右衛門忠政女)

実直(まねなむ)

又杉枝宮内

正徳二年(四月一日徳川家繼に初見、十三歳)七月十一日養子同三年四月朔日(徳川家繼に)初見享保十年十月廿八日御本丸御広敷御用同十一年閏正月十二日田安中納言殿(宗武)二丸(御座)之節御広敷御用同十八年七月十九日(同廿九日迄)(ツツシ)天英院殿(照姫、近衛基熙女、徳川家宣側室)御広敷御用同年九月十三日 月光院殿御広敷御用同廿年十一月(ツツシ)利根姫君(紀伊宗直女、徳川吉宗養女、伊達宗村室)御

広敷御用元文四年六月八日 月光院殿御用寛保元年四月五日家督小普請同月十日唯今迄之通御本丸并所々御殿方御用可勤之旨被仰付同年七月十七日寄合延享三年三月廿八日御用之節(ツツシ)可罷出旨被仰付同四年二月七日奥御醫師同年五月晦日 安祥院殿(左京局、三浦義周女、家重側室、清水重好生母)御同御用宝曆六年十二月廿七年西丸勤

同七年正月十二日 心観院殿(倫子、閑院五十宮、徳川家治側室)御同御用同八年四月四日死五十八歳(法名永達)同寺三葬(妻北村重太郎季但女、中村権之丞和知女)

(女子)

(仙丈)

実知(まねち)

(寛延元年十一月二十八日徳川家宣に初見、時に十五歳、同三年九月二十七日父に先たちて死す、十七歳)

実北村重太郎季但二男

仙庵 仙良 吉五郎 (母某氏女)

実真(まねま)

養子宝曆八年七月三日家督小普請同九年四月三日初見寛政六年閏十一月十七日致仕(五十九歳、妻実直女)

— (女子)

— (女子)

(母実直女)

仙良

実美(まねみ)

寛政六年閏十一月十七日家督小普請(二十四歳)同十一年八月六日医業出精ニ付蒙御褒詞(妻佐橋儀兵衛佳方女、後妻目黒氏女)

(女子)

(興庵 母佳方女)

(実徳(まねとく))

(実秀)

(英次郎)

次に紹介する「栗本家系譜」は『官医家譜』十に所収され  
ており、『諸家譜』第二十一(三九〇頁)の記載と比べる  
と、母・妻・兄弟姉妹・法名等の記事はないが経歴の詳しい  
部分も多い。『官医家譜』には初代俊行が大久保忠朝に仕えて  
いたことや綱吉より印籠を賜ったことなど別の記載が見え  
る。

初代の俊行は(盲人と確認できない)、杉山に師事後大久保忠  
朝に仕え、その後幕府に登用され、子孫も幕末まで鍼科医員  
を勤めた。

藤原姓

常憲院殿(徳川綱吉) 御代

栗本

家紋 酸漿草(鳩酸草)

高三百俵

栗本宗珍入道四代之後胤近江国之住人栗本善左衛門尉元胤惣  
領右之通申伝候得共家伝の系図等無之以前之儀不詳

剃髪

初名

杉説 杉庵

善左衛門

俊行

大久保加賀守(忠朝)方ニ仕杉山檢校(和一)門弟ニ而針医ニ  
て罷在候元禄五年十二月三日新規被召出同月十五日(徳  
川綱吉に)初見御切米式百俵被下寄合席同六年正月廿六日  
御側針医同年十二月十一日加秩百俵賜都合三百俵ニ成蒔絵  
印籠三ツ琉球青貝御印籠一ツ赤銅牛象眼御小柄壹本色紙御  
目貫一貝頂戴外々南京焼菓子鉢頂戴之処焼失元禄十五年十  
二月廿八日死五十九歳(法名日晋)本所中郷石原妙源寺ニ葬  
(妻村上氏女)

(某)

剃髪 初名  
杉節 杉知 亀之助 (母村上氏)

元龜

元禄十(十二)年三月十五日部屋住ニ而(徳川綱吉に)初見同  
十六年三月五日家督小普請寛保二年六月廿日(療治出精によ  
り)寄合同三年正月廿九日(タイトウ)蓮浄院殿(おすすめの方、園  
池公屋女、簡筒隆賀養女、徳川家宣側室)御用可相勤旨同四年  
九月廿五日死六十七歳(法名日是)同寺ニ葬(妻山口朔庵某女  
後妻松平清六郎乗勝女)

(直正)

剃髪

初名

杉節 杉貞 伝藏 (某氏)

元齡

延享四年十二月二日家督小普請天明元年十二月三日死四十八(五十三)歳(法名日登)同寺ニ葬(妻佐藤慶南祐章女)

(女子)

剃髮 初名

杉貞 伝蔵 (母祐章女)

元輔

天明元年十二月廿五(二十六)日家督小普請(二十五歳)寛政三年十月四日常々家業出精ニ付以来月次五節句惣出仕等登城可仕旨(妻内田玄勝正啓女)

(女子)

(杉庵 伝蔵 母某氏)

(元良)

(母荒川権六郎直徳女)

(某)

(女子)

(女子)

最後に紹介する『日本一流杉山流』鍼術十箇条(武田科学振興財団杏雨書屋所蔵、『臨床鍼灸古典全書』八、刊本、四一〜七四頁、オリエント出版社、一九八九年)は、本文十五丁という小冊子である。本書は、杉山から香取十連社が伝承した奥義を一子相伝で伝えた秘伝書で、江戸浅草広小路東仲町に住んでいた九代目浅藜堂香取星龜順に伝承されたものである。成

立は、杉山が没後(一六九四)すぐの元禄九年(二六九六)五月十七日に一回目の改め、享和三年(一八〇三)に二回目の改めが行われている。その内容は肝心の部分になると「口伝」とあつて簡素なものである。内容を細かく見ると、前書・秘伝十箇条・伝承者一覧・免許状・早引十四経穴名の五項目に分かれている。経穴の部分は現在の経穴と同じなので略した。翻刻に際しては句読点をつけた。

弁財天 日本一家

御夢想 鍼術十箇条元祖

杉山流 極秘 相伝

抑 我家ニ伝ル処ノ杉山流ハ、前惣檢校元清(和ニ)先生鍼術ニ於テ多年精神ヲ抽ズルニヨツテ、弁財天ヨリ御夢想ニヨツテ是ヲ受ルノ妙術ナリ。依之國君(徳川綱吉)是ヲ聞コシ召、遂ニ高位ノ大病ヲ療ズ。其後、元禄七甲戌五月中旬、杉山元清(和ニ)先生大病ノ砌、我先祖十連社ヲ召テ曰、我已ニ病重シ。我若シ死セバ神秘空シク絶滅セン。御夢想ノ極秘、汝一人コレヲ伝ヘン。我死スルノ後、日本一流杉山流ト号シテ弘ムベシト有リ。ココニライテ、宝永五年マデ凡ソ十五年ノ間、コレヲ天下ニ弘ム。其口伝十箇条有。末ニ記ス。誠ニ弁財天靈夢ノ秘密。病ヲ療スル事ハ、他流ノ及ブ処ニアラズ。実ニ秘密ナレドモ、修心ノ人ヲ得テコレヲ口授スベキ也。此伝誠ニ妙針・妙術。此極秘十伝ヲ学ブ者ハ、其神靈・奇効ノ妙ヲナス。能其門ニ入、其術ヲ修シテ、其室ニ入ノ妙有リト

云爾。  
しんかいりう。

鍼術十箇条

- 第一 鍼ヲ抜口伝ハ何ホド、鍼病ツキテモ散鍼ナク抜口伝
  - 第二 鍼ニ病ヲツケ、釘抜ニテモヌケザル様ニ病ヲ附ル口伝
  - 第三 一時殺ノ伝。針一本ニテ氣絶サスル口伝
  - 第四 右殺シタルヲ針一本ニテ活ス口伝
  - 第五 一切氣附鍼、刺ヤウ、又針用様ノ口伝
  - 第六 惣身肉中ニ鍼折込タルヲ抜口伝
  - 第七 上ミ下モヘ針シテ氣絶シタルヲ立ドコロニ活ス口伝
  - 第八 早疔・早瘰癧・喉痺ヲ救ヒ助タル口伝
  - 第九 禁鍼・禁灸・人神順者ノ処。又ハ病ヲ鎮散ズル鍼ノ口伝
  - 第十 天応・散針ノ穴。委細ニ分ル処。又針ヲ下ス口伝
- 右十箇条ハ、杉山流ノ極秘ニテ他流ニアラズ。口伝ヲ学ブ人ハ数年修練シタル人ニモ劣ラザル妙伝也。極テ秘密ナレドモ修心ナル人ニハ伝ヘベキ者也。

(流派を受け継いだ者)

元祖杉山先生法号

- 第一 即明院殿杉山前惣檢校権大僧都法印眼斐元清
- 第二 十連社
- 第三 十誉
- 第四 老誉

第五 大誉

第六 香取

第七 已代女

第八 竹智女

喜代女

免許の事

当家杉山流極秘十箇条、此後貴殿依御懇望、逐一ニ口伝する処明白也。尤極秘ニ候故、貴殿子孫へ相伝するのみにて、決而他言不可有之者也。仍免許状如件。

杉山流元祖香取星龜

岩崎 西遊 殿

早引十四経穴名

左ニあらハす所の経穴、我ゑらみあらたむる所ニあらず。古へよりづ(図)する所也。あやまり有べし。前々有所の針灸書ニ合せ見べし。

(以下十四経の各図と経穴を略す)

元禄九丙子歳(一六九六)

五月十七日弘初

享和三癸亥歳(一八〇三) 改判(二回目)の改め)

江戸浅草広小路東仲町

浅藜堂(藜はあかざ)

香取星龜廻順

(一回目の改め)

参考文献・注

(1) 『官医家譜』(請求番号二〇六五一六)は、曲直瀬養安院正琳編、全十七冊。本書は、記事の内容が寛政年間(一七八九〜一八〇〇年)で終わっているものでこの時期に成立したものと思われる。また、『諸家譜』より後の記事はない。

小川春興は『本朝鍼灸医人伝』(半田屋、一九三三年)で『官医家譜』を使い幕府の鍼科の医員を多く紹介している。

(2) 管鍼術については、杉山と同時代の岡本一抱『図解正誤鍼灸拔萃大成』(鍼灸医学典籍大系)十五、出版科学研究所、一九七八年)の中に、長さは軸一寸・穂一寸八分と記している(二六頁)。鍼管しんかんの長さは鍼より三分ほど長く、鍼の太さは捻り鍼より太めの方が痛みがなく、施術方法は左手で鍼管を経穴の上に置き、鍼を鍼管の中に入れ、右の示指を中指の上に重ねてから現在のように示指で鍼の頭を弾き、管は左の親指と示指で中ほどを持ち、中指で皮膚を押さえ、管を抜いてから右の親指と示指で捻り入れる場合とそのまま捻る方法とがある(五三〜四四頁)。

(3) 登用後その身代限りの者もいるが、かなりの家が幕末まで医員を勤めている。

(4) 杉山に関する多数の著述については、拙稿「杉山和一」その文献と伝説」で詳細を紹介したので、ここでは主なものあげる。小川春興「杉山検校の史的研究」(『本朝鍼灸医人伝』、半田屋、一九三三年)、富士川游「日本医学

史 決定版」(形成社復刻、三二五頁、一九七九年)、同「杉山和一先生」(『富士川游著作集』第七卷、三三三頁、思文閣、一九八〇年)、木下晴都「杉山和一とその医業」(『漢方の臨床』九一・一一二、四三頁、一九六二年)、加藤康昭「日本盲人社会史研究」(未来社、一九七四年)等を参照。

(5) 小川前掲書で、杉山の弟子を三島(四一頁)・島浦(四二頁)・島崎(四三頁)・杉枝(四三頁)・石坂(四四頁)・栗本(四五頁)・本川自哲(五三頁)、また杉山流派の系図(四六頁)を見ると板花もあり計八名としている。加藤前掲書(二〇七・一一二・一二二頁)では、杉岡・三島・杉島・杉枝・島浦・板花・徳山・松山・美津都座頭・春都座頭をあげている。

(6) 島浦益一は、「杉山真伝流」の奥義書を沢山残している。詳細は前掲の拙稿を参照されたい。また、益一については、小川前掲書(四二頁)の中で紹介してある。子孫の和田春徹(六二頁)・春長(六二頁)・正胤(六三頁)・正定(六三頁)についても触れている。子孫の和田春徹は『鍼治由来』(『臨床鍼灸古典全書』三二、写本、四五九〜四六八頁、オリエント出版社、一九九二)で、明治維新を迎えて東洋医学の廃止、鍼施術の衰微に遭遇し、明治政府宛に嘆願した。

(7) 関東惣検校・惣録については、「江戸惣検校并惣録代々の事」(『当道大記録』巻之巻、筑波大学附属盲学校所蔵)による。

(8) 島崎登栄一については、小川前掲書(四三頁)で『官医

・家譜』を使い紹介している。子孫の栄元(五二〜三頁)についても触れている。

(9) 杉枝真一については、小川前掲書(四三〜四頁)で『官医家譜』等を使い紹介している。子孫の仙庵(六一頁)・杉良(六一頁)・良叔(八六頁)も触れている。

(10) 埼玉県史調査報告書『分限帳集成』(七九頁、埼玉県民部県史編さん室、一九八七年)。吉保の昇進や川越藩について須田茂『武威国藩史総覧』(二九九〜三〇四頁、聚海書林、一九八九年)も参考となる。

(11) 『補訂版国書総目録』第四卷(岩波書店)を見ると現存しない。

(12) 栗本俊行が杉山和一の弟子である事は、小川前掲書(四五頁)の中で紹介し、杉山流を脱却し栗本流を創始したとある。子孫の杉知(五〇頁)・杉貞(五〇頁)・元輔(五〇〜一頁)についても触れている。

(群馬県立盲学校教諭)